

アルヴァックスの集合的記憶論における 過去の実在性

金 瑛

アルヴァックスの集合的記憶論は、過去は現在の観点から絶えず再構成され続けるというテーゼを中心に受容されてきた。だが本稿では、そのような一面的なアルヴァックス理解の問題点を指摘し、アルヴァックスが過去の実在性やその現在への連続性を強調した議論を展開していた点を再評価する。そして、彼がそのような議論を展開する上で注目した空間と記憶との関係が、記憶理論において重要な示唆を与えることを示し、アルヴァックスの記憶理論の意義を再評価することを目的とする。

1 はじめに——構築主義的記憶論の克服に向けて

デュルケーム学派第二世代の社会学者であるモーリス・アルヴァックス（1877 - 1945）は、死後数十年あまりの忘却の期間を経て、近年その集合的記憶論によって学際的に再評価されている¹。たとえば、「文化的記憶」・「社会的記憶」についての研究、歴史と記憶の関係をめぐる議論などがアルヴァックスの記憶理論を継承するかたちでなされている²。

アルヴァックスの記憶理論は、80年代以降の「国民国家批判」をはじめとする構築主義的潮流が盛り上がるなかで再評価されてきた。構築主義的潮流とは、たとえばベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』（1983）のように、「国民の記憶」が構築されたものであるという事実やその構築の力学を暴く研究の流れである（Anderson 1983=2007）。そして、この流れにホロコーストや南京大虐殺などの過去の「戦争の記憶」をめぐる議論の隆盛が加わるこ

とで、主に政治的に集合的記憶が構築される力学を扱う研究が大量に生み出されてきたといえる³。それゆえ、ルイス・コーザーが「現在主義」と名づけたことに象徴されるように、アルヴァックスの記憶理論は、過去の記憶が現在の観点から絶えず再構成され続けるというテーゼを中心に受容され、構築主義に親和的なものとして受容されてきたのである（Cosser 1992: 25）⁴。

だが、構築主義的な記憶論の問題点は様々な指摘されている。松浦雄介が指摘するように、構築主義的な記憶論には大きな問題点が二つある。第一に、なぜ特定の過去が他のかたちではない特定のかたちで再構成されるのか、その再構成を行なう現在の要因はどのように生じたのかを、構築主義では十分に説明できない。第二に、たとえある記憶が構築されたものであっても、それが真正な記憶として現在の主体のあり方に様々な影響を及ぼす理由を構築主義では十分に説明できないのである（松浦 2005: 27-36）。

確かに、構築主義的な観点からの記憶研究

は、記憶が書き換えられるその都度の現在の政治的力学を描き出す点では優れている。だが、その議論は現在における記憶の構築をめぐる操作やイデオロギー的な闘争を指摘するだけの議論に陥りやすく、なぜ他ではありえないある特定の過去が個人や集団を惹きつけ、集団による記憶の共有や集団間の記憶をめぐる対立を生み出すのかを十分に説明できていないように思われる。野上元が指摘するように、記憶の共有が共同性を生むのか、それともはじめから存在する共同性に基づいて記憶が共有されるのかという問題は、集合的記憶論にとっての難問であり続けている。この難問を看過してしまえば、集合的記憶論は、記憶が構築される政治的力学を論じるだけの平板な議論に落ちてしまうだろう（野上 2006: 42-51）。

ここでは、これらの難問を解決するために、バリー・シュウォーツの議論を補助線として利用したい。シュウォーツは、集合的記憶研究における理論的な立場を構築主義と反構築主義の二つに分類した上で、両者を統合することを説いている（以下では議論の便宜上、シュウォーツのこの区分を「現在主義」と「過去主義」と表記し本文中で使用する）⁵。シュウォーツによれば、「現在主義」は現在において過去が絶えず再構成されることを強調する。それに対し「過去主義」は、社会変動に直面しても維持される過去の連続性が現在を規定していることを強調する。シュウォーツによれば、われわれに過去を想起せしめる現在の社会は、まさにその過去によって規定されてもいるという二元性を有しているために、その説明には「現在主義」と「過去主義」の統合が必要であるという。そしてこの文脈で、アルヴァックスは「現在主義」でしかないとして批判されている（Schwartz 1991）⁶。

アルヴァックスの記憶理論が「現在主義」に

とどまるものならば、シュウォーツの批判は妥当であろう。しかし、アルヴァックスの記憶理論を仔細に検討してみると、実はそのなかには過去からの連続性を指摘している箇所が多く見受けられる⁷。つまり、アルヴァックス自身の理論のなかに、シュウォーツのいう集合的記憶の二元性が見取れるのである。それゆえ重要なのは、その二元性をアルヴァックス自身の記憶理論から論じ、現在アルヴァックスを離れて独り歩きしがちな集合的記憶という概念を、本来の文脈に引き戻すことではないだろうか。そこで本稿では、従来軽視されてきたアルヴァックスの「過去主義」に着目したい。その上で重要となるのが、アンリ・ベルクソンの記憶理論からの影響である⁸。

『記憶の社会的枠組み』や『集合的記憶』でベルクソンが痛烈に批判されていることから分かるように、アルヴァックスの「現在主義」は、過去が現在に与える影響をもっぱら強調したベルクソンへの批判から生み出されたものである。だが一方で、アルヴァックスの「過去主義」となると、それはベルクソンの議論を批判的に継承し、乗り越えようとしたものであると考えられる⁹。そしてそれは、ベルクソンが過去の実在性を説明する際に用いている「持続」という概念が、アルヴァックスの記憶理論においても中心的な役割を果たしていることに象徴されている。だが、このような観点からのアルヴァックス再評価は少ないのが現状である。したがって本稿では、ベルクソンの記憶理論との関係から、アルヴァックスの「過去主義」について考察することにした。

しかし、記憶の集合的性質を論じたアルヴァックスの記憶理論は、もっぱら個人的な領域に限定して記憶を論じたベルクソンの記憶理論とは大きく異なってもいる。この異同を明らかに

するために、本稿では、ベルクソンの記憶理論において比較的軽視されていた空間を、アルヴァックスが記憶の最も重要な要素の一つとして論じている点に着目する。そして最終的に、アルヴァックスの論じた空間と記憶の関係が、今日の記憶理論においても重要な示唆を与えることが示されるだろう。

2 アルヴァックスの「現在主義」と「記憶の枠組み」

まず、アルヴァックスの「現在主義」について再検討していこう¹⁰。一般に、過去の出来事についての思い出は、脳や無意識などの個人的領域に保存され、保存している本人だけがそれを再生できるとされる。これは、記録・保持・想起という記憶の一般的な過程として理解されている。だがアルヴァックスは、この過程が純粹に個人的な領域に限定されるという考え方を批判する。

脳のなか、あるいは自分だけが近づくことのできる心の片隅に、過去の思い出が存在し保存されている場所を探してみても無駄である。なぜなら、過去の思い出は外部から呼び起こされるものだからである。自分がその成員である諸集団に関心を向け、少なくともしばらくの間はそれらの集団の思考様式を取り入れるのなら、私は絶えずそれらの集団から思い出を再構成する手段を受け取ることができる。……過去は無意識の状態で再生されるのではない。あらゆる事柄が示唆しているように思えるのは、過去は現在という基盤から再構成される、ということである。(Halbwachs [1925] 1994: vi - viii)

このように、アルヴァックスにとっての記憶とは、過去の思い出をそのまま再発見することではなく、集団の観点から過去を再構成する営みにほかならない。そのため、この再構成の過程で「社会を構成する様々な集団は……非常にしばしば過去を歪曲」(Halbwachs [1925] 1994: 289) しうるし、「社会は、諸個人を分裂させ諸集団を互いに引き離す恐れのあるものは、すべて記憶から消し去る傾向」(Halbwachs [1925] 1994: 290) を持つことになる。このような過程を経て、集団内部の成員たちによって思い出が共有される営みが、集合的記憶なのである。

以上の点にのみ着目すれば、アルヴァックスの記憶理論は「現在主義」でしかないだろう。そこには、過去からの連続性を指摘するような議論は見当たらない。そのため、アルヴァックスが現在における過去の再構成に注目するあまり、過去からの連続性を見逃しているという指摘も可能となる。しかし、現在における再構成を強調する文脈で、アルヴァックスはこうも述べている。

思い出とはかなりの部分、現在から借用した所与の力を借りて過去が再構成されたものである。だがその一方では、以前の時代になされた別の再構成によって用意されて、過去が再構成されたものでもある。(Halbwachs [1950] 1997: 118-9=1989: 73)¹¹

ここで注目したいのは、現在における再構成が、「以前の時代になされた別の再構成によって用意されて」いるということである。つまり、想起を規定する現在の基盤は、過去と断絶して独立に存在しているのではなく、過去によって規定されたものにほかならないのである。それでは、過去

によって規定されたこの現在の基盤とは何だろうか。アルヴァックスはそれを「枠組み cadres」という言葉によって表現している¹²。

「枠組み」の基盤は、集団あるいは様々な集団によって構成された社会にあるとされている。そのためアルヴァックスは、集団や社会によって維持されて想起を規定するもの、あるいは家族などの集団それ自身に「枠組み」という言葉を広く用いている。しかし、これらのすべてが本質的な「枠組み」と考えられているわけではないことに注意が必要であろう。

ジル・モンティニーによれば、アルヴァックスが本質的な「枠組み」の要素として考えていたのは、言語・時間・空間・「体験」である (Montigny 2005: 25-6) (議論の便宜上、以下これらを「言語枠組み」・「時間枠組み」・「空間枠組み」・「体験枠組み」と表記する)。だが、これらの「枠組み」の位相はそれぞれ異なったものであるから、モンティニーのようにこれらの諸要素を同列に扱ってはならない。これらの「枠組み」はその位相によって、「言語枠組み」、「時間枠組み」と「空間枠組み」、「体験枠組み」の三つに分類することができる。

「言語枠組み」は、集団によって用いられ、物体や人物、場所を示すのに役立っている。そのため、個々の思い出の意味が言語によって示されるのであるが、その意味は言語の性質上、集団の影響を受けそれに規定されている。アルヴァックスは、「言語枠組み」を欠いた状態として、失語症患者の例を挙げている。失語症患者は、時間や空間のなかに思い出を位置づけることはできるのだが、その意味を言語によって表現し、集団という文脈に位置づけることができない。ゆえに、アルヴァックスは、失語症患者は集合的記憶に参加できない存在であると述べている。

次に「時間枠組み」と「空間枠組み」であるが、これらは特定の時期や場所に出来事を位置づけることによって、出来事の連続性や意味を確かなものとする「枠組み」である。時間や空間は、集団や社会によって維持され表象されているものであり、睡眠下ではそれらの「枠組み」の影響力は減退するとされる。そのため、夢は時間と空間の表象を持つが、それらは現実の時間・空間とは異なっていることもあり、脈絡を欠いていることも多いので、夢と想起は違うと述べられている。

最後に「体験枠組み」であるが、これをアルヴァックス自身の言葉で言い換えると、「生きられた歴史 *histoire vécue*」(MC: 105=56)あるいは「生きている歴史 *histoire vivante*」(MC: 113=66)となる。これらの用語は、「学んだ歴史」あるいは「書かれた歴史」と対比させて用いられている。アルヴァックスによれば、「学んだ歴史」は単なる歴史的観念に過ぎないが、「生きられた歴史」は、何らかの痕跡によって過去の実在性を感じさせ、あたかもその過去が体験され具体的に生きられているかのように感じさせる「枠組み」である。それゆえこの「枠組み」は、過去が現在に連続しているという感覚を人々に抱かせる¹³。このアルヴァックスの考え方は、「われわれの記憶が依拠するのは、学んだ歴史ではなく、生きられた歴史なのである」(MC: 105=56)といった記述や、「生きられた歴史は、ある思考がその過去のイメージを維持し再発見するために依拠する、生きたしかも自然な枠組みを構成するのに必要なものをすべて含んでいる」(MC: 118=72)といった記述のなかで強調されている。アルヴァックスによれば、この「枠組み」は、歴史叙述のなかの「日時とか名前とか定式」には還元されないもので、集団の「思考や体験の流れ」を表している

のである (MC: 113=66)。

では、この集団の「思考や体験の流れ」自体は、何によって維持されているのだろうか。アルヴァックスによれば、このような連続した流れは、同一集団の年長の世代から伝えられたり、昔の名残をとどめた街の風景などから感じ取られたりすることが多いという。その理由は明白であろう。なぜなら、言語・時間・空間は同一集団のなかで最も共有されやすいものであり、これらの「枠組み」の共有によって過去の連続性を伝達され、それを人は感じるができるからである。

このように、「体験枠組み」は、過去の実在性とその連続性を感じさせるという点で、「生きたしかも自然な枠組み」なのであるが、ほかの三つの「枠組み」に比べて観念的な要素が強いために、より具体的なほかの三つの「枠組み」によって支えられている。

以上の整理を経た上で分かるのは、現在の想起を規定する「枠組み」は、過去から連続する「思考や体験の流れ」自体、あるいはそれを支えるものとして想定されているということである。これまでの整理からすれば、「体験枠組み」がその流れ自体であり、流れを支えているものがほかの三つの「枠組み」であるということになる。

では、この三つの「枠組み」のなかで、アルヴァックスがより基底な「枠組み」として考えていたものは何であろうか。『集合的記憶』における記述を見るかぎり、アルヴァックスは時間と空間をより基底な「枠組み」とみなしていたと考えられる。たとえばアルヴァックスは、個々人の思考を外から規定し、それらを接合させる「枠組み」として言語には触れず、「集合的時間」・「集合的空間」・「集合的歴史」の三つを挙げている (MC: 107=58)。「集合的時間」と「集合的空間」は、集団によって表象され維

持された時間と空間を表している。そして、「集合的歴史」とは、これまでの説明からもわかるように、「学んだ歴史」ではなく「生きられた歴史」として集団の「思考や体験の流れ」を表す「体験枠組み」である。ところで、この「体験枠組み」はほかの三つの「枠組み」に支えられているのであった。だが、アルヴァックスにとっての「学んだ歴史」(すなわち、言語によって「書かれた歴史」)の位置づけが相対的に低いことを考え合わせると、過去の実在性の基盤としては、「時間枠組み」と「空間枠組み」がより基底な「枠組み」であると考えられるだろう¹⁴。

では、「時間枠組み」と「空間枠組み」が過去の実在性やその連続性を人々に感じさせるのはなぜだろうか。それは、その「枠組み」自体が過去から連続したものであるということによって、連続性の感覚が担保されるからではないだろうか。アルヴァックスの『集合的記憶』を検討してみると、まさにそのようなものとしてこれらの「枠組み」が論じられていることが分かる。そのため、アルヴァックスの「現在主義」における「時間枠組み」と「空間枠組み」に着目した場合、アルヴァックスの「現在主義」は「過去主義」なくしてありえないものである、という帰結が導かれよう¹⁵。

このように、アルヴァックスの「過去主義」は、人はいかにして過去の実在性を実感するのかという問題を「枠組み」という観点から考察したものであるといえる。この問題は、アルヴァックスの「過去主義」に影響を与えたベルクソンが『物質と記憶』において考察した問題でもあり、ベルクソンもそのなかで時間と空間について論じている (Bergson [1896] 2008=2007)¹⁶。以下では、ベルクソンの記憶理論との比較から、アルヴァックスの「過去主

義」について論じていくことにしよう。

3 アルヴァックスの「過去主義」

3-1 ベルクソンの記憶理論

ベルクソンとの関連からアルヴァックスの記憶理論を論じる前に、ベルクソンの記憶理論を概観しておこう。ベルクソンは、「自発的記憶 *mémoire spontanée*」と「身体の記憶 *mémoire du corps*」という二つの形式に記憶を区別している。「自発的記憶」とは、過去の出来事を「イメージ¹⁷化された思い出 *images-souvenirs*」として想起する、あるいは自発的に想起される営みである。ベルクソンによれば、過去はそのまま「純粋な思い出 *souvenirs-purs*」として無意識のなかに保存される。だが、「純粋な思い出」は、「不在の対象の表象」(MM: 79=95)として無意識のなかに潜在しており、現在に対しては無効である。想起のためには、それはイメージ化 *imaginer* されて意識のなかで現実化されねばならない。これが「イメージ化された思い出」である。「イメージ化された思い出」は、日付をもつ過去の一回きりの出来事の思い出として個性をもち、現在の生に意味をあたえている。「イメージ化された思い出」は無意識の側に近いので、観想的な営み(極限的には夢想)によって想起される。したがって、「自発的記憶」の基盤は現在よりも過去にあり、身体よりも精神にあるといえよう。

それに対して「身体の記憶」とは、たとえば課題を暗誦する営みのように、反復によって自動的・定型的なパターンを演じる *jouer* 習慣へと思い出を変化させる営みである。「身体の記憶」は、「自発的記憶」のようにそれぞれの思い出を蓄えるのではなく、現在の行動のためにそれらを取捨選択し、有用な形へと変化させる。

したがって「身体の記憶」の基盤は過去よりも現在にあり、精神よりも身体にあるといえよう。

これら二つの記憶は、別次元のものではなく相補的なものである。だが、「身体の記憶」は記憶というよりもむしろ「記憶によって照らされた習慣」(MM: 89=110 強調原文)と述べられているように、ベルクソンが基底的な記憶と考えていたのは「自発的記憶」である。ところで、「自発的記憶」とは、無意識のなかに実在する過去を「イメージ化された思い出」として想起する営みであり、過去が現在を規定していることが強調されていた。それゆえ、「自発的記憶」を基底的なものとするベルクソンの記憶観は、きわめて「過去主義」的なものであるといえよう。

ベルクソンの「過去主義」の背景には、「持続 *durée*」という彼独特の時間概念がある(Bergson [1889] 2007=2002)。ベルクソンによれば、時間は流れ去るのではなく持続するのだという。それゆえ、時計のように空間的に表象された時間や数学的・物理学的な時間は、並置され数えられる記号に過ぎず、差異を捨象した等質的環境にほかならないとして批判される。ベルクソンにとっての空間は、主として時間を惰性化し固定化するネガティブな要因である。そのためベルクソンは、「純粋持続 *durée pure*」という空間化されえない純粋な時間を仮定した。「純粋持続」においては、人々の意識は互いに浸透し合っており、全体として有機的に組織されているとされる。また、「純粋持続」のなかでは過去がそのまま保存され現在に持続しているとされているので、「純粋持続」のなかで人々は過去を現在に結びつけることができる。つまり、過去が現在に連続したものであると感ずることができるのである。「純粋持続」は一切の空間化を捨象した状態であるから、「純

粹持続」に身を置くには、空間のなかに置かれている身体にではなく、空間化をまぬがれた無意識の層に身を置かねばならない。それゆえ、夢のような精神的な営みや「自発的記憶」をベルクソンは重視したのである。

ベルクソンの記憶理論の秀逸な点は、過去の実在性を感じ取るという精神的な営みを、記憶の本質的な要素として論じた点にある。だが、ベルクソンの問題点は、無意識のなかに過去の実在性を措定することで、過去がどこに保存されているのかという問題を回避してしまった点にあるのではないだろうか。そのことが、ベルクソンが記憶の集合的・社会的性質を十分に説明できなかった原因であるようにも思われる¹⁸。過去が個人の精神にのみ保存されているのだとしたら、どのようにして自分自身が体験していない過去の実在性を感じ取り、他者との有機的な連帯を感じることができるのだろうか。

この、どこに過去が保存されているかという問題、言い換えるならば、人はどこから過去の実在性やその連続性を感じるのかという問題を考える場合、ベルクソンの議論では不十分なのである。ベルクソンの空間概念は、幾何学的・等質的な空間に限定されているきらいがある。そのため、ベルクソンが無意識のなかに仮定した過去の実在性を、空間に仮定する余地も十分に残っているのである¹⁹。ベルクソン自身、「イメージ化された思い出」には「時間内の日付と空間内の場所」(MM: 172=222)が残っていることを認めていた。実際、ある場所に行ったりその場所を思い出したりすることで、過去の思い出がよみがえることはよくあることである。それゆえ、たとえばベルクソンのいうイメージのように、幾何学的・等質的空間に回収されない空間性と記憶の関係について再考する必要があるだろう。

だがベルクソン自身は、「純粹持続」を仮定することで時間と空間を本質的に分離し、記憶から空間という要素を捨象してしまったのである。ヴァルター・ベンヤミンが指摘するように、この分離は本質的なものではなく、近代化という過程における歴史的な経験によってもたらされたものである (Benjamin 1939=1995)。ベルクソンと同時代の記憶論隆盛の背景として、近代化による時空間の変容および伝統的な集合的記憶の解体があることを考えれば、記憶を論じる際に空間を捨象するのは適切ではないだろう²⁰。

さらに、近年の記憶論隆盛の背景に空間への注目があることを考えれば、記憶と空間には密接な関係があると考えられるのである²¹。したがって、ベルクソンのように時間と空間を本質的に対立させるのではなく、両者を密接に関わりあったものとして考察する必要がある。そのような考察を行ったのが、時間と空間の両方を「枠組み」として考察したアルヴァックスである。アルヴァックスは、ベルクソンの「持続」という概念を応用して、様々な集団によって維持されている時間や空間が「持続」として主張することで、過去の実在性を説明しようとしたのである。以下ではまず、アルヴァックスの「時間枠組み」について論じていこう。

3-2 ベルクソンからアルヴァックスへ——「集合的時間」という「枠組み」

これまで述べてきたように、アルヴァックスは、ベルクソンが「純粹持続」のなかに仮定した過去の実在性を、集団によって表象された時間と空間に仮定することで、記憶の意味を規定する過去の実在性を説明しようとしたのであった²²。アルヴァックスにおいても、重視されているのは過去の実在性を感じ取る精神的な働き

と、その働きが現在の想起に与える意味である。

しかしアルヴァックスは、流れ去るのではなく持続するというベルクソンの時間概念から影響を受けてはいるが、個人のなかに純粋な時間を求めることができるとは考えていない。むしろアルヴァックスが着目するのは、社会的時間（社会的に構成された時間）が、人々のあいだに連帯や過去からの連続性を感じさせていることである。たとえば、民間暦に象徴される社会的時間が、民衆の独自の時間感覚によって生きられており、アイデンティティの重要な要素となっていることをアルヴァックスは指摘している。そしてアルヴァックスは、社会的時間が生まれる前提として、集団に共有された「集合的時間」というものを仮定するのだ。

「集合的時間」とは、集団の関心や理念、専心といった観念的なものが持続している不変の環境として表象されることによって、集団の成員に過去からの連続性を感じさせる基盤として働く「枠組み」である。それゆえ、この「集合的時間」が基盤となって、民間暦のような社会的時間が成立する。アルヴァックスによれば、集団の成員は、この「集合的時間」という連続性の全体のなかに個々の出来事を位置づけることで、出来事の意味を発見することができるという。「集合的時間」は、「体験枠組み」と同様に観念的な性格が強く不可視のものであるが、それを基盤とした暦などの社会的時間によって可視化されてもいるので、より観念的な「体験枠組み」を支える具体的な「枠組み」として機能しているのである。

また、「集合的時間」は集団ごとに維持されているという性質上、相互に浸透し合うことはできないし、並列して存在しているとされる。ベルクソンにとっては、時間は純粋な時間としての「純粋持続」しか存在しないのに対し、ア

ルヴァックスにとっては、集団の数に応じた複数の「集合的時間」が存在する。そのため横山寿世理は、アルヴァックスの「集合的時間」はベルクソンの「持続」とは正反対のものであり、ベルクソンが批判した空間化された時間に過ぎないと批判している（横山 2004: 53）²³。だが、「集合的時間」はただ物理的に並置されているわけではないし、「集合的時間」の内部では個々人の意識は浸透しあっているのであるから、「集合的時間」を単に空間化された時間として批判するのには問題があるだろう²⁴。むしろ、個々の出来事を図式的に並置する時間概念をアルヴァックスが批判していることに注意が必要である。この点については、アルヴァックスが歴史と集合的記憶の差異について論じた部分が参考になる。

アルヴァックスは、歴史と集合的記憶を対立したものとして記述している。この対立は、歴史が「学んだ歴史」によって支えられているのに対し、集合的記憶が「生きられた歴史」によって支えられていることに起因する。また、その「生きられた歴史」が、「集合的時間」という連続した時間感覚に支えられていることに起因する。アルヴァックスによれば、歴史は、過去を明るみに出すことで中断された連続性を修復するという目的を持つが、結果として過去と現在のあいだにある断絶を認識させるものである。なぜなら、歴史は多くの異なる出来事を、その同時性や連続性という観点から図式的に並列したものに過ぎないからである。歴史が集合的記憶の一部になるには、ある特定の出来事が、「集合的時間」という連続した流れのなかに位置づけられている必要がある。

それ（集合的記憶——筆者注）は連続した思考の流れ、ある連続した流れであって、そ

ここには何ら人為的なものはない。なぜなら、集合的記憶によって過去から保持されているのは、その記憶のなかで今も生き続けているもの、あるいはその記憶を保持している集団の意識のなかで生きることのできるものだけだからである。(MC: 131=88)

このように、集合的記憶のなかには人為的なものはまったくないとされ、人為的な営みとしての歴史と対比されている。集合的記憶が人為的な操作を被っていることが自明な現在、これは素朴な対立図式に思えるかもしれない。しかし、アルヴァックスも集合的記憶において操作が行なわれていることは指摘しているので、彼が集合的記憶にまったく人為性がないと素朴に考えていたとみなすべきではないだろう。むしろこの箇所は、人為的な要素を持たない自然な流れとして表象された時間のなかに身を置いていると感じることが、集合的記憶の重要な基盤となるという指摘として解釈すべきである。この自然な流れとして表象された時間が、現在の想起の基盤としての「集合的時間」という「枠組み」である。それゆえ、人為性が実際に存在しているかどうかよりも、自然な連続性の感覚によって人為性が見えなくされているかどうか、集合的記憶と歴史を分ける重要な境界線となる。

たとえばホロコーストなどの、自分は直接体験したことのない被害の記憶のなかで、特定の記憶が有意味なものとして想起されるのはなぜだろうか。それが想起されるには、現在へと連続した流れとして歴史のなかに「書かれて」いるだけでは十分ではないだろう。歴史を読むだけでは、必ずしもある出来事が自分と連続したものとして想起されるとはかぎらない。それが有意味なものとして想起されるためには、たとえばユダヤ人や地域集団、家族といった集団の

「集合的時間」という連続した流れに、出来事が位置づけられることが必要なのである。そしてそのことによって、過去が現在と断絶したものではなく、現在にまで持続しているという自然な感覚を抱くことが必要なのである。そうしてはじめて、歴史を読むことが集合的記憶にとっての意味ある営みとなるのだ。また、ある出来事が毎年のように反復して記念されるという事態も生じうるだろう。アルヴァックスは歴史と集合的記憶の違いを以下のように述べている。

想起する主体（個人あるいは集団）が、連続して運動している自らの思い出にまで遡っているという意識を持つことが記憶の存在条件だとするならば、歴史が記憶であるなどと言えるだろうか。というのも、歴史を読む社会と、歴史に結びつけられた出来事のかつての証人や主役だった集団とのあいだには、断絶があるからである。(MC: 130-1=87)

つまり、歴史に書かれている出来事の証人が不在となった社会においては、過去の出来事と現在とのあいだには断絶が存在しているので、歴史を読むだけではその出来事を想起することはできないのである。その出来事を想起するには、現実に存在する断絶を、連続しているという感覚によって埋め合わせなければならない。そしてその感覚は、「集合的時間」という過去の連続性の表象によってもたらされるのである。だが、歴史における連続性が退けられていることからわかるように、アルヴァックスは際限なく過去へと遡ることができるとは考えていない。あくまで個人が過去を遡ることのできる限界は、個人が参加している集団によって異なっているのである。たとえば、国民という集団のなかで過去を遡れば、かなり遠くの過去にまで

遡れるだろう。だが、友人というかなり限定された集団のなかで過去を遡れば、せいぜいその関係が始まるまでしか遡れないだろう。なぜなら、すべての集合的記憶は、「空間においても時間においても有限」(MC: 137=94)な集団によって支えられているので、おのずと遡ることのできる「集合的時間」の範囲も限られるためである。アルヴァックスによれば、集団の限界を越えたはるか彼方の時間まで遡ることができても、それは単なる空虚な時間に過ぎない。

このように、「集合的時間」は、その内部にいる人々に、集団の成員同士が類似し連続しているという感覚を与えてくれる。そのため、歴史とは異なって、集合的記憶では差異や断絶がほとんど存在していないかのように感じられるのである。そしてこのことによって、特定の過去を現在にとって有意義なものとして想起することが可能となり、想起された過去は自然なものに感じられるのである。それが現在における再構成を支える根拠ともなっている。

だがアルヴァックスは、自らが仮定した「集合的時間」を、ベルクソンの「純粹持続」のようにア・プリオリに存在するものだと考えてはいない。さらに言えば、「集合的時間」は、集団が独自の仕方でも時間を固定し表象することでもたらされる「幻想」でしかないと述べられてさえている。アルヴァックスによれば、「集合的時間」とは、「すくなくとも一定の持続の期間、絶えず変化する世界のなかで、一部の領域が相対的安定と均衡を獲得するという幻想」(MC: 192=162)、あるいは「基本的なことは、ある程度の長い期間はなんら変化しないという幻想」(MC: 192=162)である。つまり、「集合的時間」とは、実際の変化を覆い隠し、集団内部の類似と持続を前面に押し出す「幻想」としての時間なのであり、そこで感じ取られる過去

の实在性も「幻想」だということになる。

では、「体験枠組み」を支える「集合的時間」も「幻想」であるとするならば、この「幻想」それ自体は何によって支えられているのだろうか。アルヴァックスは以下のように述べている。

空間のイメージだけが、その安定性に応じて、時を経ても何も変わらないという幻想と、現在のなかに過去を再び見出すことができるという幻想をわれわれに与えてくれる。(MC: 236=207)

したがってアルヴァックスは、「幻想」としての「集合的時間」を支える「空間枠組み」を、過去の実在性を支える最も基底的な「枠組み」であると主張していることになる。これは一見すると奇妙なことに思われるかもしれない。なぜなら、一般に記憶においては時系列が重視されることから分かるように、記憶とは何よりも時間性に関わる問題系だからである。だが、先に見たように、ベルクソンと同時代の記憶理論の隆盛に伝統的な空間の解体が関係していることと、近年の記憶研究の背景に空間への注目があることに注意を向けねばならない。アルヴァックスの空間への着目は、おそらくこれらの状況を理解するのに示唆を与えてくれるはずである。次章では、アルヴァックスの「空間枠組み」について考察していこう。

4 集合的記憶と空間

前章までの議論で、過去の実在性と連続性を感じさせるように働くことで現在を規定する「枠組み」として、「体験枠組み」と「時間枠組み」について論じてきた。そこでは、「体験枠組み」が「集合的時間」という「時間枠組み」

によって支えられ、「時間枠組み」が「空間枠組み」によって支えられているというアルヴァックスの主張を確認した。本章では、アルヴァックスが最も基本的な「枠組み」として言及した「空間枠組み」について論じていきたい。

アルヴァックスによれば、都市や街道、住居やその内装などの物質的空間が安定していることで、集団は連続しているというイメージを抱き、想起の基盤を得るとされる。つまり、過去の痕跡が物質的に安定して存在し続けることによって、集団が過去からの連続性を感じ取る際の支えとなるのである。このように、「空間枠組み」には、過去の痕跡の集積としての物質的空間が含まれている。

だがアルヴァックスは、物質的空間のみによって「空間枠組み」が成り立つとは考えてはいない。アルヴァックスによれば、物質的空間のみでは「根源的な所与 *donnée primitive*」(MC: 209=183) とはなりえないのである。「空間枠組み」とは「ひとつの実在 *réalité* であり、持続している」(MC: 209=182) ものとされるが、この「実在」には物質的空間のみでなく精神的空間というべきものが含まれていると考えられる。

では、アルヴァックスの考えている精神的空間とはいかなるものなのだろうか。アルヴァックスは、「空間枠組み」を「われわれが想像したり思考したりすることによって、各々の時期ごとに再構成できるもの」(MC: 209=182) であるとも述べている。つまりそれは、「集団が外的環境と取り結ぶ安定した関係のイメージ」(MC: 195=166) として表象された、他者や外的な事物との関係性の空間的イメージなのだ。それはたとえば、そのような関係性を保持した伝統や慣習のなかに見出すことができるだろう。このイメージとしての空間性が、精神的空間としての「空間枠組み」である。

このように、アルヴァックスの「空間枠組み」は、物質的空間と精神的空間の二面が合わさった「枠組み」であるといえよう。したがって、ある思い出を想起させるような物質的空間を目の前にしていなくても、空間のイメージが人々の精神のなかに存続していれば、思い出を想起することは可能である。また、人々のあいだで空間的イメージが消え去りかかっている、ある思い出を想起させる物質的空間が残っていれば、そのイメージがよみがえることもある。たとえばアルヴァックスは、以下のような例を挙げている。

ポール・ロワイヤル修道院の修道士や修道女たちが離れ離れにさせられたとしても、修道院の建物が取り壊されたり、修道院での思い出を保持する人々が死んだりしないかぎりには、何も起こらなかったのである。(MC: 196=166-7)

この場合のように、修道院という物質的空間か、修道院の人々に想い描かれた精神的空間のどちらかが存続していれば、過去の実在性の感覚は失われず、過去を想起できる可能性は残されているのである。だが一方で、物質的空間と精神的空間は相補的に影響を与えあう密接な関係にあり、切り離して考えることはできない。物質的空間と精神的空間の関係は次のように述べられている。

昔の人々が構想したことは、物的配置のなか、すなわち事物のなかに具体化されている。また、地域の伝統の力は事物から集団へと伝えられているのであり、伝統とは事物のイメージなのである。(MC: 200-1=172)

ここで言われているのは、精神的空間は物質的空間のなかに具体化され、そのことによって精神的空間も安定性や力を得るということである。たとえば都市に顕著のように、人々の関係性は、建物の配置やその建物内部で人々が占める位置によって象徴されている。またそのような位置取りは、伝統のなかにある空間的イメージに沿ってなされている。したがってその位置取りは、「かつての集団の作品」(MC: 200=172)として大きな意味を有しているのである。

それゆえ、「石を運び去ることはできても、石と人間のあいだに樹立された関係を変えることはそれほど容易ではない」(MC: 200=172)と述べられているように、都市などの物質的空間を変容・破壊しようとする行為は激しい抵抗にあうことが少なくない。このように、物質的空間と精神的空間は相補的に作用して「枠組み」を構成している。

だが、精神的空間が物質的空間のみによって表現されるのならば、物質的空間がないところには精神的空間を見出すことができないということになる。そうであるならば、都市や家屋といった物質的空間からしか人は過去からの連続性を感じることはできないし、物理的に隣接した人々とのあいだでしか「空間枠組み」を共有できないことになる。「集団の数と同じだけ空間を表象する仕方が存在する」(MC: 232=205-6)と述べられているように、空間を表象する仕方は単に物質的なものの配置に還元されはしないのである。宗教集団のように、異なる物質的空間に属する人々が集団を形成することもあるのだから、物質的空間に依存しないかたちで精神的空間が存在することもありうるのである。

そこでアルヴァックスが着目するのが、制度

や技術である。アルヴァックスによれば、制度や技術は集団の思想の産物にほかならず、社会を結束させるために集団はそれらを生み出している。それらは外在的に現れているが、アルヴァックスはその深層に集団の精神の痕跡を読み取るべきであるという。つまりアルヴァックスは、精神的空間が制度や技術を通じて現れると考えているのである (Halbwachs 1939)。

アルヴァックスは『集合的記憶』のなかで、法律・経済・宗教における制度や技術が精神的空間をいかに形成し維持するか、そして精神的空間に基づいて集団がいかに物質的空間に働きかけるかを論じている²⁵。アルヴァックスによれば、これらは物質的空間の配置を変化させるだけではなく、精神的に空間を区分し固定することで「空間枠組み」を形成している。

ここでは、法律と空間の関係についてのアルヴァックスの議論を参照しておこう。アルヴァックスが「法的空間 espace juridique」(MC: 214=184)と呼ぶ精神的空間は、所有権などの権利を法的に保証することによって、人々が事物や場所に対してもつ関係性が恒久的なものとして表象された空間である。法律によって所有権が保証されることで、たとえ物理的には空間が区分されていなくとも、少なくとも精神的には所有という関係性が空間としてイメージされる。そして法律が失効しないかぎり、そのような空間的イメージは存続するのである。これは一種の擬制であるが、この擬制は強力な「枠組み」として働いている。アルヴァックスはほかに、相続を例に挙げている。

ある人が死んで、嫡子が相続人として残された場合に、「死が生者をとらえる」ということが言われる。まるで何の妨げもなかったかのように、相続の権利が行使されるのであ

る。つまり、まるで相続人と被相続人が一つの連続した人格であるかのように、相続が行なわれるのである。(MC: 216=186)

引用からも分かるように、相続とは単に物質的な財産の引き渡しだけを意味しているのではない。物質的空間である都市が、「かつての集団の作品」(MC: 200=172)として過去の集団の精神をとどめていたように、相続においては「法的空間」という「枠組み」の支えによって、被相続人の人格が相続人の人格へと精神的に連続しているのである。集団の成員が死んで物質的には空間から消え去ったとしても、「法的空間」という精神的空間のなかでは、その人格は現在へと連続しているのである。

このように、各々の集団は、空間を物質的・精神的に区分し固定することで、「そこに思い出をしまい込み、そのなかで思い出を取り戻すことができるような枠組み」(MC: 233=206)を形成する。それゆえ「空間枠組み」は、「十分に安定しているがゆえに、朽ち果てることもないし、どの部分も喪失することはない」(MC: 236=207)「枠組み」として、「現在のなかで過去を再び見出すことができるという幻想」(MC: 236=207)を人々に与えるのである。

これまで述べてきたことから分かるように、「空間枠組み」とは、物質的あるいは精神的に空間が固定され安定していることで、過去からの連続した時間の流れとしての「集合的時間」を支える「枠組み」である。つまり、「空間枠組み」は、集団内の人々が過去の実在性やその現在への連続性を感じ取る上での支えとなる「枠組み」なのだ。したがって、アルヴァックスの記憶理論は、過去の実在性に対する「幻想」が人々のあいだでいかにリアリティを獲得するかを、「空間枠組み」によって説こうと

したものだといえよう。そしてそれは、過去から連続する「空間枠組み」によって、集団の連続性と同質性が担保される機制を説明しようとするものでもある。「空間枠組み」は確かに人々を取り囲む拘束的なものでもあるが、人々をそのなかに物質的・精神的に包み込むことによって、過去を現在において想起する意味を人々に与えているのである。

それゆえ、記憶が構築される政治的な力学を暴くことに収斂しがちな「現在主義」の隘路を克服するために、今こそアルヴァックスの「空間枠組み」が再評価されるべきなのである。文化遺産などの様々な空間と集合的記憶との関係に注目が集まっている現在、この観点からアルヴァックスを再評価することが、重要なのではないだろうか。

5 おわりに——課題と展望

アルヴァックスの「枠組み」という概念に着目して、「現在主義」として解釈されてきたアルヴァックスの記憶理論に、「過去主義」的な側面があることをこれまで論じてきた。そこでは、「体験枠組み」と「時間枠組み」によって、過去の実在性を精神的に感じ取ることをアルヴァックスが重視していること、そしてその議論はベルクソンの「持続」から示唆を受けて展開されたことを確認した。また、アルヴァックスがそれらを「幻想」と考えていることに着目して、ア・プリオリに過去の実在性を仮定するベルクソニズムから距離をとっていることも確認した。そして、この「幻想」を支える「枠組み」として、アルヴァックスが「空間枠組み」を論じたことの意義を本稿では確認したのだった。その意義とは、アルヴァックスの記憶理論が、集合的記憶の内部において同質性が担保される

機制を、「空間枠組み」という観点から説明しようとした点である。

しかし、アルヴァックスの記憶理論の可能性を検討する上で、積み残された課題は依然として多い。たとえば、アルヴァックスの死後60年以上が経過した現在、空間やそれを取り巻く環境がアルヴァックスの時代とは単純に比較できない点を考慮する必要があるだろう²⁶。学説史的には、集合心性と集合的記憶との関係から、ストラスブール大学時代の同僚であるマルク・ブロックやリュシアン・フェーブルら、アナル学派との影響関係が問い直される必要があるだろう。また本稿では論じなかったデュルケームの社会形態学との影響関係も、物質的空間を考察する上で重要である。だが、より根本的な課題は、アルヴァックスのいう「空間枠組み」と社会的忘却との関係を問い直すことである。

ある集団の同質性の担保は、ほかの集団の集合的記憶を忘却することによって成立することがしばしばある。このことは、「国民の記憶」が成立する過程でマイノリティの記憶が忘却されることが数多く指摘されてきたことから明らかだろう。だが『集合的記憶』におけるアルヴァックスは、法律・経済・宗教といった要因によって「空間枠組み」が変容されることを指摘するにとどまっており、社会的忘却については十分な議論を展開してはいない。たとえば、「もはや漠然とさえも場所を表象できない時代に達してしまったとき、われわれは、自分の記憶がもはや及ばない過去の領域に到達してきているのである」(MC: 236=207) といった指摘はなされているのだが、あくまで「空間枠組み」の解体が忘却を促進するという指摘にとどまっている。

岩崎稔が指摘するように、その内部の連続性・同質性を強調する「空間枠組み」という視

点は、数々の忘却を経て成立した現在の優位性を説明するだけにとどまってしまう危険性も有している。岩崎が述べるように、現在の「枠組み」だけに注目しては、集団内部の利害や価値を越える批判はそもそも不可能になってしまい、集合的記憶をめぐる数々の操作が等閑視されてしまう危険性がある(岩崎 1998b)。

そのため、アルヴァックス自身が積極的に論じなかった「空間枠組み」と社会的忘却との関係を問い直すことがこれからの課題となるだろう。たとえばピーター・バークが、アルヴァックスに示唆を受けるかたちで、経済・宗教的要因による空間編成の変容が社会的忘却を促進することを指摘しているが、この方面のアルヴァックス理論の展開こそが必要なのである(Burke 1997: 47-52)。記憶による集団形成、そしてその過程で行なわれる社会的忘却の機制を、アルヴァックスの「空間枠組み」から説明すること。これこそがアルヴァックスの記憶理論が現在に対して有している意義ではないだろうか。

注

¹ アルヴァックスの集合的記憶論といった場合、1925年の*Les cadres sociaux de la mémoire* (=『記憶の社会的枠組み』)、1942年の*La Topographie légendaire des Évangiles en Terre sainte, étude de mémoire collective* (=『聖地における福音書の伝説地誌——集合的記憶の研究』)、1950年の*La mémoire collective* (=『集合的記憶』)の三著作が代表的なものと考えられている。また、アルヴァックス再評価の背景は、Confino(1997)、Hutton(2000)、山下(2004)に詳しい。

² 「文化的記憶」・「社会的記憶」については、Assmann([1999] 2006=2007) や Burke ([1992]

2005=2009:165-169) など、歴史と記憶をめぐる議論とアルヴァックスの関係については、Hartog(2003=2008)、Nora(1984=2002)、Riccer(2000=2004&2005)などを参照されたい。

³たとえば、高橋(2001)では「従軍慰安婦」問題などの戦争責任をめぐる考察、米山(2003)ではスミソニアン博物館の原爆展示をめぐる考察などがなされている。

⁴典型的なものとして、石田雄によるアルヴァックスの受容が挙げられる(石田 2000: 9-14)。また、浜(2007)、Hutton(1994)、片桐(2003, 2006)などを参照されたい。

⁵シュウォーツは、「現在主義」の代表としてモードやアルヴァックスを、「過去主義」の代表としてデュルケームやシルズを挙げている(Schwartz 1991)。

⁶岩崎(1998a, 1998b)も同様の批判を行なっている。

⁷『社会階級の心理学』においても、伝統や習慣による過去からの連続性が強調されている(Halbwachs 1955=1958)。

⁸ベルクソンはアルヴァックスのリセ時代の恩師であり、リセ卒業後も二人のあいだには折に触れた手紙のやり取りがあった。そのなかには、ベルクソンがアルヴァックスの『記憶の社会的枠組み』について触れているものもある(Bergson 2002)。アルヴァックスの記憶理論がいかにベルクソンの影響を被っているかについては、Namer(1994, 1997)を参照されたい。

⁹Hartog(2003=2008: 207)や山下(2005)がこのような指摘を行なっている。

¹⁰訳語による混乱を避けるためにここで注を付しておく。アルヴァックスもベルクソンも、記憶について語るときに *souvenir* と *mémoire* という語を使い分けている。アルヴァックスの『集合的記憶』(小関藤一郎訳)において *souvenir* は「思い出」、*mémoire* は「記憶」と訳され、ベルクソンの『物質と記憶』(合田正人・松本力訳)におい

て *souvenir* は「想起」、*mémoire* は「記憶」と訳されている。つまり、思い出される記憶の内容が *souvenir* で、それらの記憶内容を保存したり思い出したりする作用や能力が *mémoire* という語によって表されているのである。以上のことを踏まえ、本稿では *souvenir* を「思い出」、*mémoire* を「記憶」として訳語を統一する。

¹¹以下では略記号MCを用いる。邦訳も参照したが、訳文は基本的に拙訳である。

¹²アルヴァックスの「枠組み」概念について検討したのものには、林(1957)、大野(2000)などがある。

¹³アルヴァックスによれば、過去の痕跡は、彫刻、版画、書物、顔の表情のなか、場所の景観のなか、慣習、無意識のうちに保存され再現された考え方や感じ方のなかに残っているという(MC: 115=68)。

¹⁴もちろん、このことは「言語枠組み」が重要でないことを意味しない。あくまで、過去の実在性を感じさせる「枠組み」としては、「時間枠組み」と「空間枠組み」が基底的なのである。「言語枠組み」は、むしろ現在における再構成や人々のあいだでの記憶の伝達を考える上で重要であると思われる。そのため、「言語枠組み」については別の機会に論じることにした。

¹⁵安川一も、「枠組み」が過去の連続性を実感させ、想起の確かさと現実性を増していることに着目している。そして、集合的記憶が、「集団の生活世界の実質的連続性」を前提にして支えられたものであることを指摘している(安川 2006: 58)。

¹⁶以下では略記号MMを用いる。邦訳も参照したが、訳文は基本的に拙訳である。

¹⁷イマージュ *image* とはベルクソン独特の意味づけがなされた語で、精神と物質の中間領域を表すものである。それは精神の側に近ければ、記憶のなかの「映像」として表象され、知覚されることで物質的な「物の姿」として現れる。イマージュは、

この両極が混合した中間状態のようなものであるがゆえに、『事物』と『表象』の中間に位置づけられたある実在」(MM: 1=359) とされる。

¹⁸ アルヴァックスもこのような批判を行なっている (Halbwachs 1938, 1939)。

¹⁹ ベルクソンによる時間と空間の対置に対する批判は、主に市川浩の議論に依拠している。市川はこの文脈で、ユージェーヌ・ミンコフスキーの議論を紹介している (市川 [1983] 1991)。

²⁰ この点については、松浦 (2005: 7-8,23-7,91) および Matsuda(1996) を参照されたい。

²¹ たとえば浜 (2007) や荻野 (2002) などを参照されたい。また、近年の記憶論の隆盛と遺産への注目の高まりが密接な関係にあることについては、Hartog(2003=2008) を参照のこと。

²² 山下純照は、ベルクソンにおいては個人のなか仮定されていた過去の実在性が、アルヴァックスにおいては社会集団に移し置かれていると指摘

している (山下 2005)。山下の議論を補足するならば、アルヴァックスは、社会集団によって表象され維持されている時間と空間という「枠組み」に過去の実在性を仮定したのである。

²³ 横山の批判の背景には、アルヴァックスが重視した空間が、主に個人々々に対する拘束として機能していることへの批判がある。この点については、横山 (2005) を参照。

²⁴ この点については、3-1 「ベルクソンの記憶理論」も参照のこと。

²⁵ Albin Michel 版では、注に下書き草稿をもとにした異本が付されており、そこでは幾何学と空間の関係も分析されているが、今回は異本を考察の対象とはしていない (MC: 210-4)。

²⁶ 本稿はその主張に同意しないが、たとえば今井信雄は、消費文化の出現によって、時間にも空間にも拘束されない集合的記憶が形成されたと述べている (今井 2009)。

文献

- Anderson, Benedict, 1983, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London: Verso. (= 2007, 白石隆・白石さや訳『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早川.)
- Assmann, Aleida, [1999] 2006, *Erinnerungsräume: Formen und Wandlungen des Kulturellen Gedächtnisses*, dritte auflage, München: C.H.Beck. (= 2007, 安川晴基訳『想起の空間——文化的記憶の形態と変遷』水声社.)
- Benjamin, Walter, 1939, "Über einige Motive bei Baudelaire". (= 1995, 「ボードレーンにおけるいくつかのモチーフについて」浅井健二郎編訳『ベンヤミンコレクション1 近代の意味』筑摩書房, 417-88.)
- Bergson, Henri, [1889] 2007, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 9^e édition, Paris: Quadrige/PUF. (= 2002, 合田正人・平井靖史訳『意識に直接与えられたものについての試論』筑摩書房.)
- , [1896] 2008, *Matière et mémoire*, 8^e édition, Paris: Quadrige/PUF. (= 2007, 合田正人・松本力訳『物質と記憶』筑摩書房.)
- , 2002, *Correspondances*, André Robinet, et al. eds., Paris: PUF.
- Burke, Peter, [1992] 2005, *History and Social Theory*, 2nd ed., Cambridge: Polity Press. (=2009, 佐藤公彦訳『歴

- 史学と社会理論 第二版』慶應義塾大学出版会。))
- , 1997, *Varieties of Cultural History*, Cambridge: Polity Press.
- Confino, Alon, 1997, "Collective Memory and Cultural History: Problems of Method" , *American Historical Review*, 102: 1386-403.
- Coser, Lewis A., 1992, "Introduction: Maurice Halbwachs 1877 - 1945" , Maurice Halbwachs, *On Collective Memory*, Chicago & London: The University of Chicago, 1-34.
- Halbwachs, Maurice, [1925] 1994, *Les cadres sociaux de la mémoire*, Paris: Albin Michel.
- , 1938, "Individual Psychology and Collective Psychology" , *American Sociological Review*, 3(5) : 615-23.
- , 1939, "Individual Consciousness and Collective Mind" , *The American Journal of Sociology*, 44(6) : 812-22.
- , [1950] 1997, *La mémoire collective*, Paris: Albin Michel. (= 1989, 小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社.)
- , 1955, *Esquisse d' une psychologie des classes sociales*, Paris: M. Rivière. (= 1958, 清水義弘訳『社会階級の心理学』誠信書房.)
- 浜日出夫, 2007, 「歴史と記憶」長谷川公一ほか『社会学』有斐閣, 171-99.
- Hartog, François, 2003, *Régimes d' historicité: Présentisme et expériences du temps*, Paris: Seuil. (= 2008, 伊藤綾訳『「歴史」の体制——現在主義と時間経験』藤原書店.)
- 林三郎, 1957, 「記憶の社会性——モーリス・アルバックスの場合」『社会学評論』8(1): 2-17.
- Hutton, Patrick, 1994, "Sigmund Freud and Maurice Halbwachs: The Problem of Memory in Historical Psychology" , *The History Teacher*, 27(2): 145-58.
- , 2000, "Recent Scholarship on Memory and History" , *The History Teacher*, 33(4): 533-48.
- 市川浩, [1983] 1991, 『ベルクソン』講談社.
- 今井信雄, 2009, 「死者と記憶——震災を想起させる時間、空間、そして映像について」大野道邦・小川伸彦編『文化の社会学——記憶・メディア・身体』文理閣, 90-106.
- 石田雄, 2000, 『記憶と忘却の政治学——同化政策・戦争責任・集合的記憶』明石書店.
- 岩崎稔, 1998a, 「シモニデス・サークル1 モーリス・アルブヴァックスの『集合的記憶』1」『未来』377 20-5.
- , 1998b, 「シモニデス・サークル2 モーリス・アルブヴァックスの『集合的記憶』2」『未来』378: 9-15.
- 片桐雅隆, 2003, 『過去と記憶の社会学——自己論からの展開』世界思想社.
- , 2006, 『認知社会学の構想——カテゴリー・自己・社会』世界思想社.
- Matsuda, Matt K., 1996, *The Memory of the Modern*, New York: Oxford University Press.
- 松浦雄介, 2005, 『記憶の不確定性——社会学的探究』東信堂.
- Montigny, Gilles, 2005, *Maurice Halbwachs: vie, œuvre, concepts*, Paris: Ellipses.
- Namer, Gérard, 1994, "Postface" , Maurice Halbwachs, *Les cadres sociaux de la mémoire*, Paris: Albin Michel, 297-367.
- , 1997, "Postface" , Maurice Halbwachs, *La mémoire collective*, Paris: Albin Michel, 237-95.
- 野上元, 2006, 『戦争体験の社会学——「兵士」という文体』弘文堂.
- Nora, Pierre, 1984, "Entre mémoire et histoire" , Pierre Nora éd., *Les Lieux de mémoire*, Paris: Gallimard. (=

- 2002, 「記憶と歴史のはざまに」 谷川稔監訳『記憶の場——フランス国民意識の文化＝社会史〔1〕』岩波書店, 29-56.)
- 荻野昌弘編, 2002, 『文化遺産の社会学——ルーブル美術館から原爆ドームまで』新曜社.
- 大野道邦, 2000, 「記憶の社会学——アルヴァックスの集合的記憶論をめぐって」『神戸大学文学部紀要』27: 165-84.
- Ricoeur, Paul, 2000, *La mémoire, l'histoire, l'oubli*, Paris: Seuil. (=2004, 久米博訳『記憶・歴史・忘却〈上〉』新曜社 & 2005, 久米博訳『記憶・歴史・忘却〈下〉』新曜社.)
- Schwartz, Barry, 1991, "Social Change and Collective Memory: The Democratization of George Washington", *American Sociological Review*, 56(2): 221-36.
- 高橋哲哉, 2001, 『歴史／修正主義』岩波書店.
- 山下純照, 2004, 「記憶の観点からの演劇研究 (1) ——文化研究を意識した演劇学の構築をめざして」, 『千葉商業大紀要』42(3): 197-219.
- , 2005, 「記憶の観点からの演劇研究 (2) ——理論的背景①: 三つの主題系、ベルクソン、アルヴァックス」, 『千葉商業大紀要』43(2): 31-50.
- 安川一, 2006, 「過去に眼差す——その社会学的考察のために」 森村敏己編『視覚表象と集合的記憶——歴史・現在・戦争』旬報社, 49-78.
- 横山寿世理, 2004, 「記憶の社会性と自我——アルヴァックスのベルクソン批判から」『東洋大学二十一世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報』1: 48-54.
- , 2005, 「失われた帰属——アルヴァックスの集合的記憶とベルクソンの自我」大野道邦編『日仏社会学叢書 第二巻 フランス社会学理論への挑戦』恒星社厚生閣, 191-209.
- 米山リサ, 2003, 『暴力・戦争・リドレス——多文化主義のポリティクス』岩波書店.

(きん えい、京都大学大学院、ei1020@l05.mbox.media.kyoto-u.ac.jp)

(査読者 鵜飼大介、木村至聖)

The reality of the past in Maurice Halbwachs's theory of collective memory

Ei Kin

Halbwachs's theory of collective memory has been received mainly as the thesis that the past is constantly reconstructed from the perspective of the present. However, this paper points out the problem of this one-sided understanding of Halbwachs, and revalues Halbwachs in the point that he argues the reality and continuity of the past. The purpose of this paper is revaluing his arguments about the relation between space and memory from the perspective of the reality of the past in collective memory.